

北海道の美術

北の自然と人々

北海道美術の名作が一堂に

当館は開館以来、「北海道の美術」を収集や調査研究活動等の柱のひとつとしてきました。現在、この分野の収蔵作品は1,790点にのぼり、当館の全所蔵作品4,336点のなかで41パーセントを占める大きなコレクションとなっています。また、北海道の近代美術の流れをたどるうえできわめて

重要な作品が数多く含まれているのも特色です。

今回の「これくしょん・ぎやらりい」では、北の自然と人々をテーマに、選りすぐった絵画・版画・彫刻約50点を展示します。林竹治郎《朝の祈り》、小川原脩《雪》、三岸節子《摩周湖》、神田日勝《室内風景》、砂澤ビッキ《風》等々、名作の数々に会う絶好の機会です。

自然と人—身近で、限りなく深いテーマ

自然も人も、いかにしえから人間の創造力を限りなく呼び起こし続けてきた、身近で深いテーマです。明治から今日までの北海道美術でもこのテーマは、風景、風俗、群像、具象、抽象等、多彩な表現のなかでさかんに取り上げられています。今回はそれらの作品を、近代的な表現の模索が重ねられた明治から

戦前の時代と、作家それぞれの個性がいっそう際立つようになった戦後から現代という二部構成によって紹介します。先に挙げた作品についても大きな時代の流れのなかでご覧いただくと、あらためてそれぞれが北海道美術史において放つ輝きとともに、近現代における表現の変遷のダイナミズムを感じ取っていただけることでしょう。



足田敬蔵《写生画帳》より 1879～1881（明治12～14）年



浮世絵とスケッチ。ほぼ同じ時代だが、足田敬蔵のまなざしはより近代的。



翠軒竹葉《北海道鯨大漁概況之図》(部分) 1889（明治22）年
※表紙作品



砂澤ビッキ《風》
1988（昭和63）年



制作時期もジャンルも異なるが、身体で感じ取った大きな自然の表現には通じ合うものがある。



小川原脩《雪》
1940（昭和15）年



西洋の最新動向「シュルレアリスム」を取り入れながら、故郷のニセコの山を描いた。



神田日勝《室内風景》
1970（昭和45）年



克明な細部描写にもかかわらず、画面に漂う非現実感。そこに人間表現の鍵が。



三岸節子《摩周湖》 1965（昭和40）年